# 平　野　窯　跡

（昭和9～45年頃の石見焼窯跡）

地すべり対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005 年 12 月

島根県浜田土木建築事務所

島根県　浜田市教育委員会

平野窯跡全景

窯詰め状況の復元（奥に棚板、手前にヌケ・ハリを置く）

窯跡 断面

製品（すり鉢、外装用タイル、七輪底）

# 序

浜田市では江戸時代終わり頃から「石見焼」と呼ばれる粗陶器と瓦が焼かれ、現在も伝統産業として受け継がれています。しかし、その起源や変化・流通範囲など不明な点が多くあります。浜田市教育委員会ではこれらの文化財の解明も重要と位置づけ、浜田土木建築事務所の地すべり対策工事に伴い、平野窯跡の発掘調査を実施しました。

今回の調査の結果、昭和9～45年頃のすり鉢・つぼ・タイルなどを焼いた登窯を確認し、棚板を用いて従来の石見焼にはない窯詰め法を行っていたことがわかりました。

昭和40年代後半に石見焼がプラスチック製品や水道の普及により生産量が激減するという時勢の変化を考える上で重要な調査となりました。

本書はこの調査結果を末長く後世に伝え、学校教育や生涯学習など幅広く活用するための基礎資料としてまとめたものです。この調査報告が地域史研究への一助となり、文化財保護思想の普及へと結びつくことを願っております。

おわりに、あらゆる面から調査に御協力いただきました地権者の平野公望氏、及び地元の方々、浜田土木建築事務所に対し深甚なる謝意を表する次第であります。

平成17年　12月

浜田市教育委員会

教育長　山　田　洋　夫

# 例　　言

1．本書は浜田市教育委員会が平成17年度に実施した地すべり対策事業に伴う平野窯跡発掘調査の報告書である。

2．調査は以下の組織で行った。

調査主体　浜田市教育委員会教育長　竹中弘忠（～平成17年11月18日）
山田洋夫（平成17年11月19日～）

調査指導　島根県教育委員会　文化財課

調 査 員　榊原博英（浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係 主任主事）

事 務 局　浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係
文化振興課長　山根　稔
文化財係長　原　裕司　主任主事　瀧山恵子　主事　堀　智美

3．調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。

調査協力　平野公望、森脇　朗

調査参加　岩本秀雄、佐々木五郎、坪倉ひとみ、中田貴子、半場利定
村上美佐子、吉賀久雄、吉田安男

4．基準点は工事に伴い北陽技研株式会社が設置したものを使用した。挿図の方位は磁北で示している。

5．附属CDには本文（PDF形式）、窯跡計測表・遺物集計表（Excel形式）、調査・遺物写真（JPEG形式）を収録している。

6．出土遺物、実測図及び写真は浜田市教育委員会に保管してある。

7．本書の執筆編集は榊原が行った。

# 本　文　目　次


第１章　調査の経過…… 1
第２章　遺跡の位置と概要…… 1
第３章　調査の方法と成果…… 6
　第１節　調査の方法…… 6
　第２節　遺構…… 6
　第３節　遺物……10
第４章　総　括……17

## 第１章　調査の経過

浜田土木建築事務所より内田町での地すべり対策工事の計画が提示され、市教育委員会に平成17年５月19日付けで埋蔵文化財分布調査依頼書が提出された。

工事の対象地は丘陵斜面に位置し、周知の埋蔵文化財包蔵地である平野窯跡（島根県遺跡地図　Ｌ185）が含まれていた。遺跡の位置は島根県浜田市内田町192番地である。

分布調査結果を受け、事業者との協議を行ったが、この段階では雨量計測中のため具体的な工事計画は決定していなかった。このため、まず測量により窯跡の規模を把握し、工法の決定を受けて発掘調査の範囲を決定する計画となった。平成17年６月７日に浜田土木建築事務所から文化財保護法94条第１項に基づき埋蔵文化財発掘通知書が提出された。その後、最終的に工事工法が決定され、窯跡は工事用進入路にあたることとなった。現地調査は８月３日から９月22日まで実施した。遺物整理は現地作業と併行して行い、10月19日まで実施した。調査面積は150㎡である。

## 第２章　遺跡の位置と概要

周辺には縄文時代以前の遺跡は確認されていない。平野窯跡の西側の丘陵上に位置する道休畑遺跡では、弥生時代末頃～古墳時代初頭の焼失竪穴住居１棟が確認されている（東森2004）。古墳は横穴式石室が露出する塚原山古墳群、石室の奥壁らしき石が道路脇に残る後面古墳、上内田古墳がある。中世には要害山城があり、竪堀・堀切・土塁などが確認されている（島根県教育委員会1997）。中世の周布郷で内田村･内村を支配した内氏（周布氏の庶子）との関係が考えられる。

江戸時代末頃から石見地域で生産された「石見焼」は、浜田市西部では明治時代末頃にひろまる。戦時中の企業統制により多くの工場が休業し、戦後に一時復帰した窯もある。しかし、プラスチック製品や水道の普及により昭和40年代後半にはほとんど生産が行われなくなる。浜田市西部は土質の関係で、すり鉢と瓦の生産が主体であった。

「石見焼」は「丸物」と呼ばれる生活用品の粗陶器（すり鉢･甕など）と「瓦（石州瓦･赤瓦）」に分けられる。釉は出雲の宍道産の来待石と呼ばれる砂岩を基にした来待釉（赤褐色）と石見の温泉津産の長石を基にした並釉（透明釉）が代表的である。

今回の調査地は標高約64～73mの丘陵斜面に位置する。窯跡は丘陵南側に位置し、大口から途中までは上内田集会所の建設時に削平されていたが、窯跡の最上部の煙出しから５房はそのまま残っていた。

各文献による平野窯跡の記述は以下のとおりである。

浜田市商工水産課『浜田の窯業』昭和28年

・平野工場　経営者　平野藤太郎　　常雇数　５
・昭和10年　石見陶器工業組合成立、戦時中は島根陶磁器統制組合、戦後に石見陶器工業共同組合

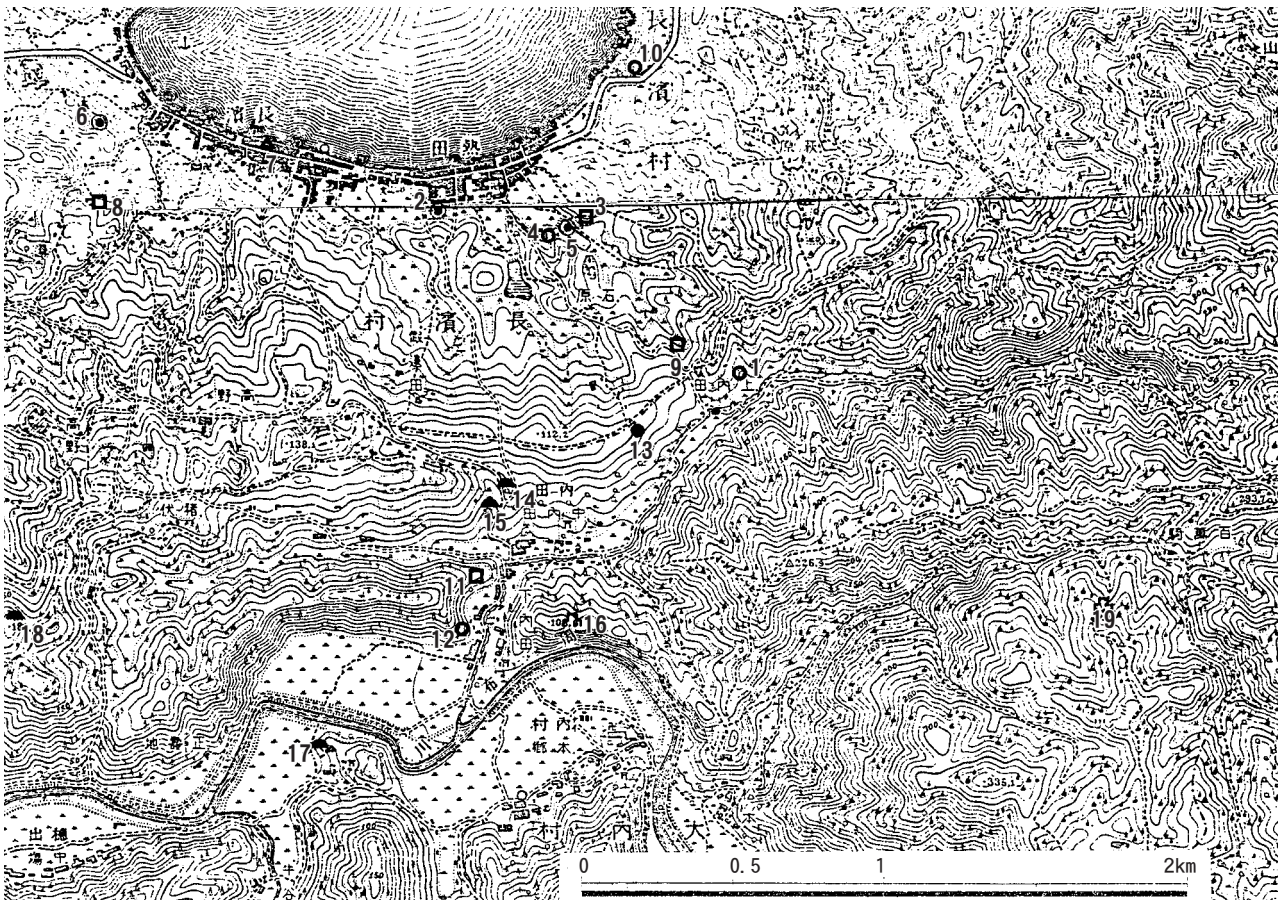
平田正典『石見粗陶器史考』昭和54年

・浜田市日脚で某がすり鉢窯を経営していたが、柿田にその窯をゆずり、郷里の内田に帰り、すり鉢窯をひらいていた。
・昭和18年の統制令で陶器株式会社が再編され、浜田陶器株式会社になる。
　平野工場は休業（存置工場は７工場、約20の工場が休業）
・昭和42年１月　石見陶器工業組合員名簿
　平野製陶所　代表者 平野藤太郎　製品名 スリ鉢・外装タイル
　※昭和50年４月の名簿には記載なし

平田正典　島根県生産遺跡調査カード　昭和59年
　平野窯　　昭和９年頃創業　　昭和45年頃廃業
　すり鉢　10間の登窯

これらの文献と聞き取り、現地確認によると窯跡の経営者は東側の谷奥の平野氏で、室田窯（熱田町）で修行し、日脚町ですり鉢窯（現在の柿谷窯跡）を経営していた。その窯を柿谷氏に譲り、地元に帰って窯をひらいたという。昭和９年頃から昭和45年頃まで操業していた。窯を覆う瓦葺の屋根もあり、部屋が10房あったという。大口は当初一口であったが、後に築窯師である嶋田氏により二口に改修したとのことであ

○…丸物窯　◉…瓦窯→丸物窯　□…瓦窯　　平成11年発行・番号は表１に対応

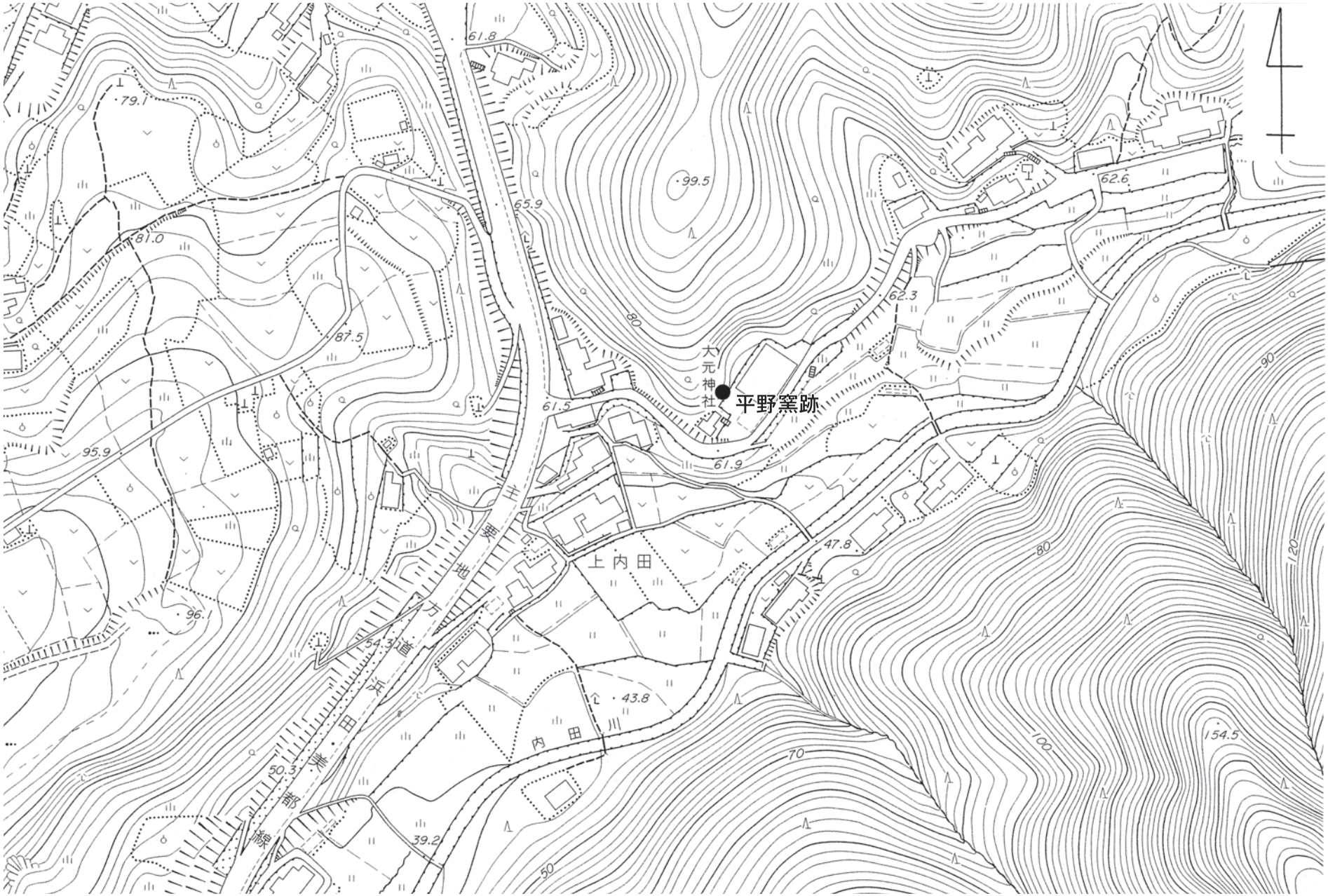



第１図　遺跡周辺図（S＝1/25,000）　　明治34年発行・番号は表１に対応

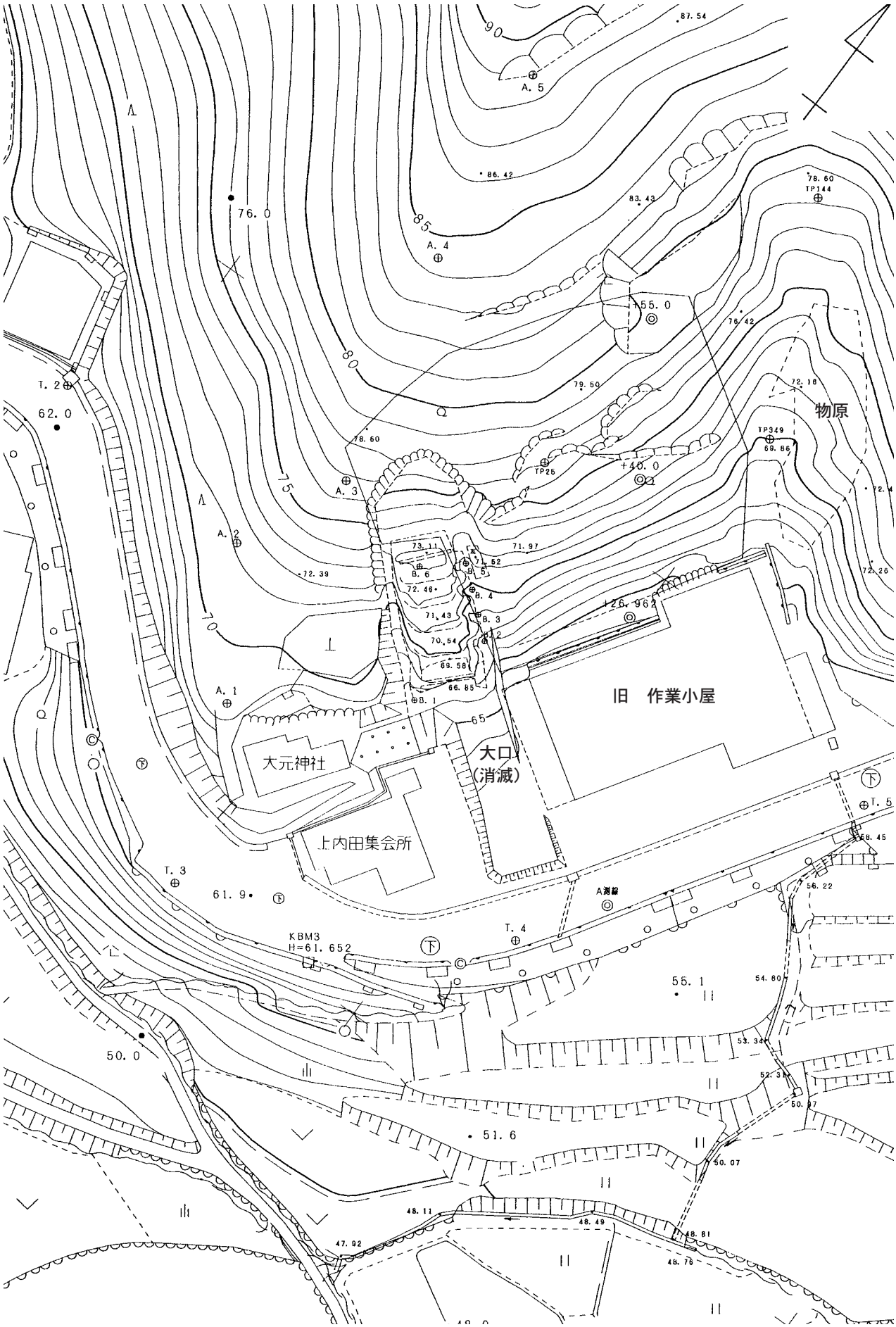
| 番号 | 遺　跡　名 | 種　　別 | 概　　要 |
|---|---|---|---|
| 1 | 平野窯跡 | 石見焼窯跡(丸物) | すり鉢・昭和9～45年：発掘調査実施 |
| 2 | 室田窯跡 | 石見焼窯跡(瓦→丸物) | 瓦・丸物・すり鉢・明治30年代～戦後頃：発掘調査実施 |
| 3 | 小泉窯跡 | 石見焼窯跡(瓦) | 瓦・大正年間（明治は今浦窯か） |
| 4 | 森脇窯跡 | 石見焼窯跡(丸物) | 丸物・すり鉢・明治38年創業～平成3年頃まで |
| 5 | 森脇分家窯跡 | 石見焼窯跡(丸物・瓦) | 丸物・すり鉢・瓦・大正11年創業・戦後移転 |
| 6 | 佐々木窯跡 | 石見焼窯跡(瓦→丸物) | 瓦・すり鉢 |
| 7 | 永見窯跡 | 窯　跡? | 人形(初期長浜人形)・文化年間創業 |
| 8 | 渡辺窯跡 | 石見焼窯跡(瓦) | 瓦・大正～昭和 |
| 9 | 今浦窯跡 | 石見焼窯跡(瓦) | 瓦・明治年間創業 |
| 10 | 村田窯跡 | 石見焼窯跡(丸物) | 丸物・すり鉢・昭和初期創業 |
| 11 | 岸本窯跡 | 石見焼窯跡(瓦) | 瓦・明治年間創業 |
| 12 | 内田窯跡 | 石見焼窯跡(丸物) | すり鉢 |
| 13 | 道休畑遺跡 | 散布地 | 弥生土器、土師器、焼失竪穴住居：発掘調査実施 |
| 14 | 後面古墳 | 古墳 | 土器・刀剣・石室石材? |
| 15 | 上内田古墳 | 古墳 | |
| 16 | 要害山城跡 | 城跡 | 山城 |
| 17 | 王子山古墓 | 古墓 | 宝篋印塔3基 |
| 18 | 塚原山古墳群 | 古墳 | 円墳、横穴式石室 |
| 19 | 古城跡 | 城跡 | |

**表１　周辺の遺跡概要**

**作業状況**




第２図　平野窯跡位置図（1）（S＝1/2, 500）




第３図　平野窯跡位置図（2）（S＝1/500）

る。窯跡の横には一部改修された作業小屋が残っており、道路側には薪を置く小屋もあったとのことである。陶土は現地では取れず、熱田方面など近くから入手していた。昭和27・28年頃の常雇人数は５人である。すり鉢などを焼いていた。物原（不良品捨場）は窯から東約35mの谷斜面にあり、表面観察ではすり鉢と焼台類が積み上げられていた。

## 第３章　調査の方法と成果

### 第１節　調査の方法

石見焼は江戸時代以降、石見地域で陶器と瓦を焼いた伝統産業であり、地域において特に重要な遺跡になる。これまで江津市・浜田市・益田市で石見焼窯跡の発掘調査が行われており、各地で製品や窯の状況が明らかにされている。このため必要最低限の調査を実施することとした。人力で窯跡の清掃を行い、記録作成（平面図・立面図・房内平面図・房ごとの計測）を行った。その後、重機で窯の長軸に併せて地山面まで半裁し、窯の構築・修理状況の確認と縦断図を作成した。横断面は立会により確認を行った。

房内には大小様々な焼台類が約1880点、レンガ類が約700点と大量に積まれていた。基本的に後に運び入れられたもので、これらを人力で房から運び出した後に分類・集計を行い、各房内の種類ごとに１～２点の選別を行った。集計結果は表３に示している。

なお、物原が調査対象外のため具体的な製品の種類と窯道具の詳細は聞き取りによる点が多い。物原の表面観察で確認できなかった製品も焼成しており、文献や聞き取りと発掘調査結果の整合性が十分に取れなかった点もある。

### 第２節　遺構（表２・第４・５図）

窯は斜面に築かれた連房式登窯で、各部屋は火格子穴で繋がっている。最も下段に大口（焚口）と各房の焚庭（火溝）に薪をくべて窯の温度を約1,300度まで上げる。各房には入口と作業場がつき、房内には様々な焼台が積み上げられていた。

本来、窯は10房あったことが聞き取り等で判明しており、窯跡は最高所の煙出・10房～７房は天井まで残り、６房は半壊、５房から下の部屋と大口は現存していない。窯の残存長約15m・幅約７mを測り、大口推定部までの全長は約26mになる。

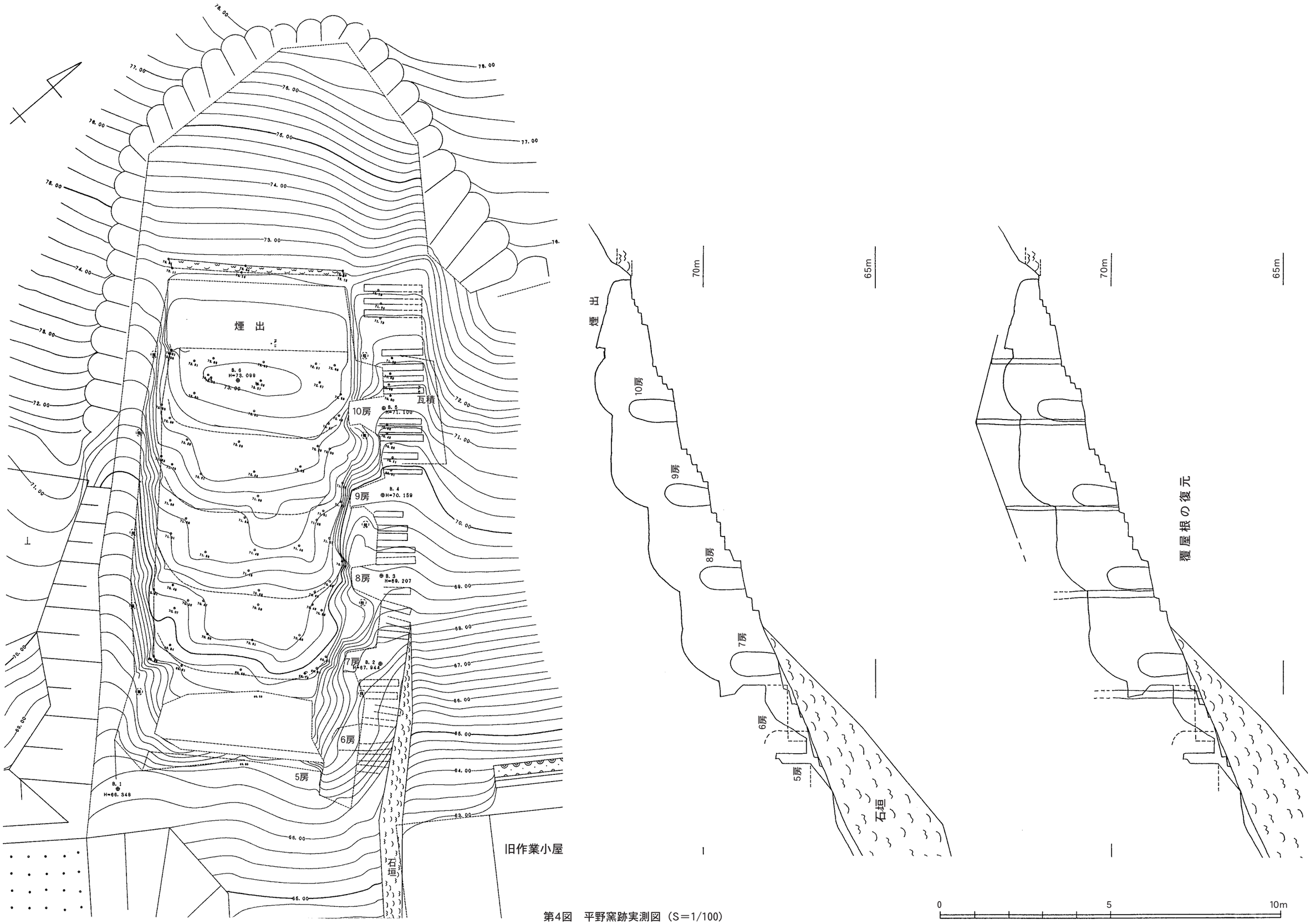
周辺地形をみると、窯が築かれた場所はもともと急斜面であったと考えられる。ここで時期は不明だが、幅約10m・長さ23m以上の範囲が地すべりにより窪み、形成された緩斜面を利用して登窯が築かれている。

登窯は基本的にレンガとその間に接着剤のように粘土（コウ土）を用いて組上げられる。レンガはトンバリ（大・小）・アゼと呼ばれる自作のレンガ、既製品の耐火レンガを用いている。各房の計測値は表２に示した。房の幅は後方の10房が最も大きく、下に向かって房がやや小型化する。奥行と高さは７・８房が大きく、大人でも充分立つことができる。床（ハマ）勾配は10～11°である。焚庭は多量に釉着しているが各房で幅・深さなど大きな差は見られない。各房の勾配は図面から測ると24°となり、４寸勾配で築かれている。火格子穴は大半が耐火レンガ３段を積んだ後で薄いレンガを上に付け足して、穴の大きさを調整して小さくしている。大きさは縦15～21cm、横幅９～13cmである。

火格子穴の数は７～８房が16と最も多く、他の房に比べて火見穴側に穴が多い。これらの房は大きいため、火の周りを良くするために火格子穴を増やしたと考えられる。

房内部にはレンガを内側からはめ込んで周りに粘土を充填した場所などがあり、何回か補修や改築が行われている。房内面は釉が厚く付着しないように砂と泥をまぶしたものを塗っていたとのことで壁面の釉着をみると砂粒が含まれている。釉の付着具合は耐火レンガとトンバリ・アゼで釉の付着がまったく異なり、耐火レンガは釉が付着しにくい。このため、房の壁で造り替えたように釉の付着具合が異なる房もあった。

各部屋には下から向かって右側に幅0.6～0.7m、高さ1.32～1.39mの長楕円形の入口がつく。現状では入口横に焼成時に入口を塞ぐレンガやトンバリが積み上げられている。これらのレンガ類を取り除くと外から色見を出し入れする火見穴がある。この穴は外からレンガを差込み塞ぐことができる。入口横には薪置き場や通路として使われる平坦面（作業場）があり、レンガと石




第4図　平野窯跡実測図（S＝1/100）

| | ハマ(床) | | | | | 火格子穴 | | 焚庭(火溝) | | | 勾配(°) | 小口(入口) | | | 甲(天井部) | | | 作業場 | | | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 木取り(幅) | 奥行 | 天井高さ | 勾配(°) | 火格子穴数 | 幅 | レンガ幅 | 幅 | 深さ | 火格子穴数 | | 幅 | 高さ | 火見穴 | 露抜き穴 | | 床面からの高さ | 幅 | 奥行 | 下段との比高 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | 左 | 右 | | | | | |
| 5房 | | | | | 14 | | | | | | | | | | | | | | | | 火格子穴のみ残る |
| 6房 | 4.83 | 1.58 | — | | — | — | — | 0.38 | — | 14 | | 0.86 | 1.36＋ | — | — | — | — | 1.03 | 0.76 | 0.93 | 天井半壊 |
| 7房 | 4.91 | 1.72 | 1.87 | 10 | 16 | 15×11 | 22.5×7 | 0.36 | 0.49 | 16 | 24 | 0.70 | 1.39 | □0.13×0.19 | 0.14 | 0.15 | 1.87 | 0.99 | 0.99 | 1.049 | 天井残存 |
| 8房 | 4.86 | 1.70 | 1.95 | 11 | 16 | 20×10 | 23×7 | 0.39 | 0.55 | 16 | 24 | 0.61 | 1.38 | □0.12×0.21 | 0.13 | 0.16 | 1.95 | 1.50 | 0.92 | 0.853 | 天井残存 |
| 9房 | 4.80 | 1.65 | 1.84 | 10 | 15 | 21×13 | 22×10 | 0.40 | 0.50 | 16 | 24 | 0.58 | 1.35 | □0.17×0.12 | 0.135 | 0.13 | 1.84 | 1.60 | 1.16 | 0.975 | 天井残存・床面下に旧焚庭が残る |
| 10房 | 5.0 | 1.45 | 1.60 | 10 | 15 | 17×9 | 22×16.5 | 0.36 | 0.52 | 15 | 24 | 0.65 | 1.32 | □0.18×0.16 | 0.11 | 0.11 | 1.60 | 1.75 | 0.84 | 0.761 | 天井残存 |
| 煙出 | 幅4.8 | 長さ1.7 | 高さ0.5～1.3 | | 15 | | | － | － | － | 18 | － | | － | － | － | | － | － | 0.787 | 煙出穴を煉瓦で組上げ、盛土後に粘土を敷いて瓦を貼る。下面に旧焚庭と砂が一部残る。付属房を撤去して長い煙出に造り替えたと考えられる。 |

| | 覆屋根の柱(m) | |
|---|---|---|
| | 左・直径×高さ（柄穴） | 右・直径×高さ（柄穴） |
| 7番 | | 0.20×2.54(縦1，横1) |
| 8番 | 0.13×2.40(縦1，不明1) | 0.12×2.42(縦1，横1) |
| 9番 | 0.13×2.90＋(不明) | 0.12×3.25(縦2，横1) |
| 10番 | 0.13×3.28(縦2，横1)<br>支柱0.12×2.12 | 0.15×3.10(縦1，横2) |
| 煙出 | 0.12×1.87＋(縦1) | 0.14×1.93(不明) |

**表２　窯跡各部計測表(m)**

を使った階段で繋がっている。階段の横が崖のため、石垣が下から７房横まで築かれている。石垣は長さ12.8m・比高差６mになる。このため、全体的に階段の幅と作業場が他の窯と比べて狭く、６～７房あたりは特に狭い印象を受ける。10房から上はもともとの丘陵が残っており、調査前には10房の作業場に瓦が積み上げられていた。この瓦は窯の覆屋根が倒壊した後に撤去して積み上げたと考えられる。この瓦積みの下では階段・作業場と丘陵の境にヌケを列状に並べて土留めにしていた。また、窯の西側はトンバリ・石を用いて石垣状に補強しており、窯の平面形は西側が直線的になる。西側に意識的に排水用の溝は掘られていなかったが、地形からみても、ある程度自然の溝として機能していたと考えられる。

房内部には焼台、レンガなどが多量に積み上げられており、ほとんどが後に運び入れられたものである。ヌケ類は房下側の砂面や焚庭に多く並べてあり、他の焼台やレンガは房上方のレンガ段の上に積み上げられたように見える。このため、操業時の位置を保つ焼台に留意しながら清掃を行った。しかし、大半の焼台は原位置になく、10房で一つだけ砂面に置かれたハリが確認されたのみであった。焼台類を取り出したあとの床面は、房の上方にレンガ・トンバリ・棚板を用いて２列のレンガ段が造られた状態であった。レンガは２～３段積み上げられており、下は砂（ハマ）である。

断割調査の結果、９房の床面下と８房の床面火格子穴の下で、改築前の焚庭底と考えられる硬質な暗灰褐色層が確認され、少なくとも７房より上を１回改築している。10房の床面では改築の痕跡が確認できなかったが、もともと７～10房は現在より狭かった可能性がある。

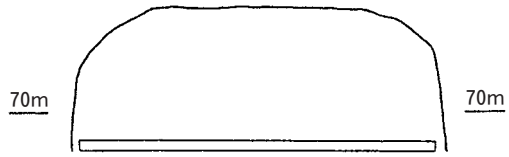
窯の構築方法は地山を焚庭～床面にあたる部分を斜めに、火格子穴・天井を組むレンガを置く部分は段状に加工してレンガ類で窯を組み、焚庭をレンガで造り床面に砂（ハマ）を入れている。なお、地山は被熱して赤色になるが、もとは浅黄色の硬い土である。地山の低い側はもともと地山が地すべりで動いたためか、しまりが悪く、一部は岩が砕けたようになっていた。

天井（甲）はトンバリ・アゼを使ってアーチ状につくり、隙間に粘土や焼台・すり鉢・瓦の破片をくさび状に詰めている。さらにその上に保温効果を高めるため粘土（コウ土）を盛る。コウ土の厚さは天井アーチの屈曲部で５cmほど、アーチの分岐部分は50cmと厚く盛られていた。天井の高さは７～８房が1.87～1.95mと高い。トンバリやアゼで組み上げられた各房の天井の左右２箇所にはヌケをはめて周囲を粘土で塞いだ露抜き穴がある。外側には穴を塞ぐためのレンガが穴に対して２個づつ残っていた。

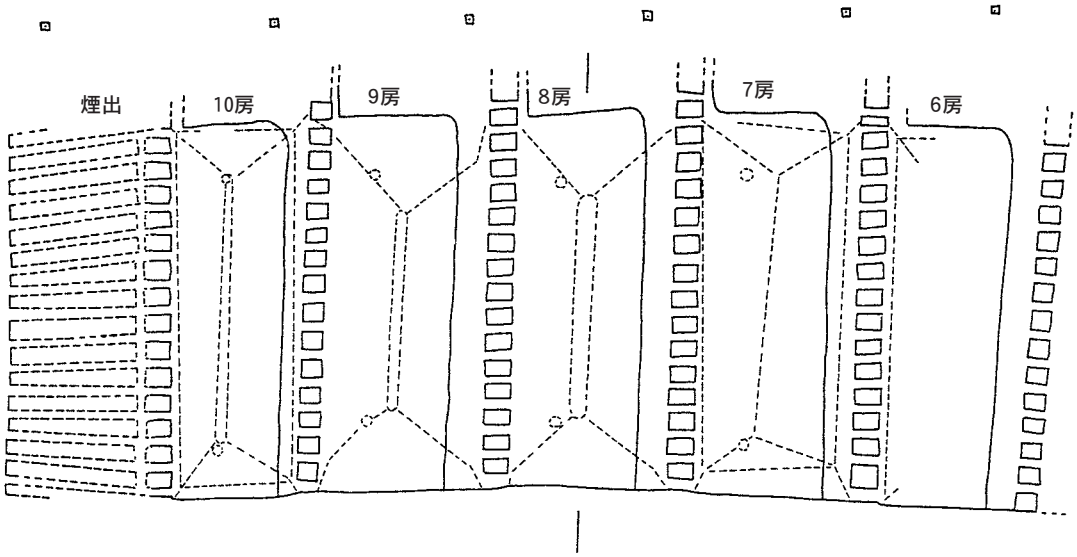
10房の後には煙出の穴が15列造られている。他の窯の煙出に比べてやや長く、長さ1.7m・幅4.7mになる。断割り調査の結果、現在の煙出の下にレンガと付属房の床面に敷いた砂（ハマ）が一部残っており、煙出はもともとあった付属房をつぶして煙出に改築したため、一般的なものより長くなったと考えられる。レンガを組んで煙出穴をつくり、上に焼物片の混じる土を20～90cm程度盛り、薄く粘土を張って屋根に葺くように瓦を押し当てて並べている。煙出の穴から約40cm離れてレンガが並べられており、厚く釉着している。窯焚時には煙出穴からも火が吹き出たとのことである。

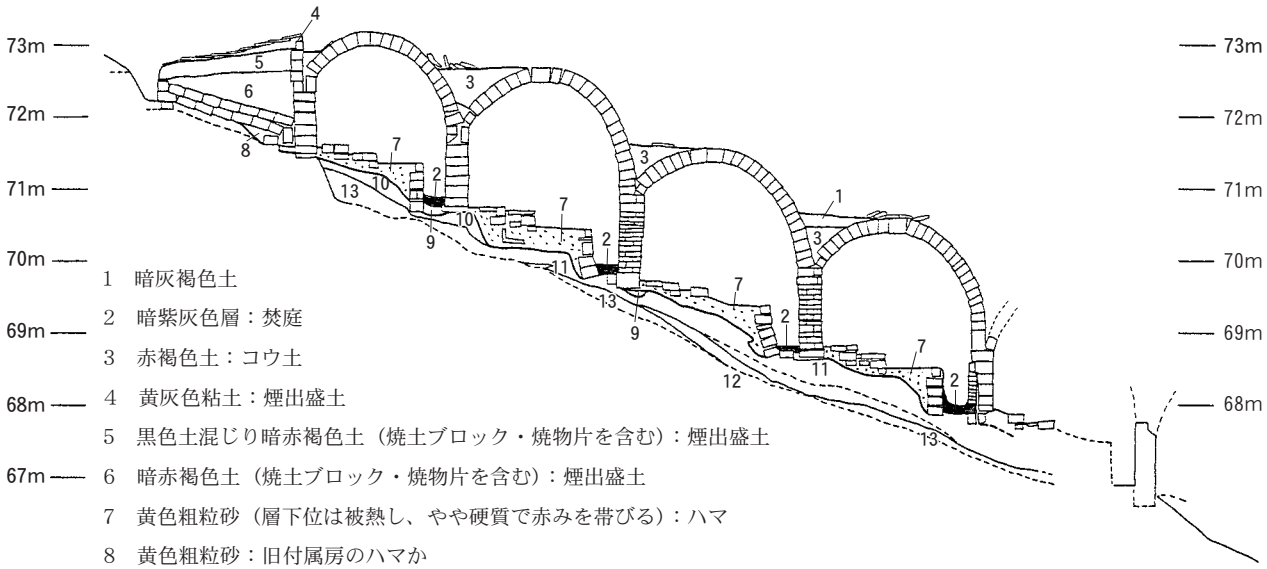
窯の側面には、覆屋根の木柱が残っていた。柱は傾いたり動いていたが、ほぼ元位置は確認できた。入り口側は柱の根元部分をレンガやヌケで固定していた。西側は石垣を柱に合わせて凹ませ、固定できるようになっている。９房の西側の柱は斜面の支柱も残っていた。天井には屋根瓦がそのまま転落していた。一部は片付けられて作業場に積み上げられていたが、およそ窯の覆屋根（カマヅヤ）の様子がわかる（第４図）。６～７房天井の瓦は左に掛桟部、10房天井の瓦は右に掛桟部があり、掛桟部の左右が逆になる。通常は左に掛桟部がくるように葺くことから、上りの屋根が９房まで付き、10房は下り屋根になっていると考えられる。煙出にも一部屋根が掛かっていたとのことである。残存する柱の高さも９房が一番高くなっている。

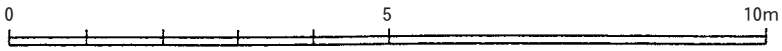
屋根に葺かれたり、煙出上に置かれた瓦は来待釉の赤瓦といぶし瓦が両方みられ、いぶし瓦は10房から煙出で多く用いられている。赤瓦は釉の発色が悪いものが多い。




8房横断




第５図　平野窯跡房内平面図、断面図（S＝1/100）

各房の内部は、床面の高所側に主にレンガを用いて２段の段を作り、焚庭側は砂面である。砂面にはハリやヌケを据え、レンガ段の上には様々なレンガ･棚板･焼台を使って台を組み上げ、窯詰めを行っていた。窯詰めの際は砂面に立てるヌケ類を焚庭の溝へおいて砂面を通路とし、棚板列を組上げていた。レンガ段がある房の側壁には方柱状のレンガが溶着した痕跡が多く見られ、棚板で台を組み上げた後に方柱状のレンガを壁との支えとして、粘土を挟んで詰めていた。レンガや棚板には粘土隗の溶着したものがないことから棚板とレンガは砂などをはさんである程度組み上げ、方柱レンガで支えていたと考えられる。

**第３節　遺物（表３・第６～９図）**

房内には、大小様々な焼台類が約1880点、レンガ類が約700点と大量に積まれていた。大半の焼台類はあまり被熱しておらず、使用期間は短いものが多い。しかし、中には厚く釉が付着したものもあり、長期間窯内に据えて用いられた焼台もある。焼台類は釉が厚く付着すると作業時に手を怪我するため頻繁に交換したようである。また一度使用した焼台も次は砂をまいたり、別の焼台を挟まないと溶着しやすくなる。

焼台・レンガ類（第６・７図）

焼台類の名称を本報告で記述する上で簡単に整理する。実際に窯場で用いられた言葉ではなく、便宜上の分類名である。「ヌケ」(17～21・26) は窯詰の際に用いる円柱状の焼台で、様々な大きさのものがある。基本的に房内の砂を敷いた床に埋めて立て、台上に焼物を置く。

「ハリ」（２～４・６・７）は焼物を重ね焼きする際に、溶着を防ぐためにはさむ焼台である。脚部が円形のまま未調整のもの（２～４)、切込を数箇所入れて接地面を少なくしたもの（６・７）がある。高さの高いものを「筒状ハリ」（５）とする。「サヤ」(16) は中に焼物を収める円形の箱で、１点しか出土していない。「ヌケ」「ハリ」「筒状ハリ」は底部中央に穴を開けているのに対し、「サヤ」は平底である。

「棚板（８・９）はレンガを四隅にたてて組み合わせ、房内に棚状の小部屋を作り、その中や上に製品を並べる。「方形焼台」(13) は台形状のものと直方体のものがあり、レンガ・棚板の高さ調整などに用いられた。「円形焼台」（１・22～25）はヌケやハリの上に置いて溶着を防ぐもので、円柱状（１･25)、輪状 (24)、ドーナツ状に二段つくったもの (22・23) がある。

焼台類には接地面に白色の液体が塗られているものがある。これは使用時に耐火性のある水酸アルミナを薄くかけ、溶着を防ぐためと聞いている。

焼台類の胎土は、最も砂粒を多く含んで粗いものはひし形のレンガである。ヌケの胎土は砂粒を含み、やや粗いものが多い。ハリは製品の胎土に近い緻密なものが多い。レンガ類はヌケと同様にやや粗いものが目立つ。大型の焼台は胎土が粗い傾向があるが、大型のヌケでも砂粒の混じりが少ないものもあるため一概にはいえない。

１は円柱状の円形焼台である。円形に砂が片面付着するものが多いが、両面につくものもある。タイルと溶着したものもある。なお、中心に直径３㎝の穴をあけたものもごく少量ある。２～４はハリで切込のないものである。２は上面に椀の高台状の溶着、白色不透明の釉着がみられるが、どの製品を置いたかは不明である。接地面に白色の水酸アルミナを薄くかける。３・４は法量が異なるが、ほぼ同じ作りである。図化したものは未使用だが、接地面に白色の水酸アルミナが薄くつき、すり目の痕跡が残るものがある。上面には砂が少量付着する。いずれもすり鉢の内面見込みに置いて重焼するために用いられた。聞き取りでは、すり鉢の中にふたつぼを置くときに使い、すり鉢同士の場合は直接重ねるとのことである。５は筒状のハリで３・４に比べ器高が高い。３・４と同様に接地面に白色の水酸アルミナが薄く塗られ、すり鉢のすり目跡がつく。法量の小さいものはすり目だけつくものが多い。

６・７は切込のあるハリで、やや大型の６は１点しか出土していない。６は三角形状に７回切込で脚をつくり、７は半円状に６～７回切込で脚をつくる。半円状の切込も一度に切るものと二回波線状に切るものがある。接地面には水酸アルミナを少量つけ、剥離面に来待釉が付着する。ふたつぼ類の中において重ね焼

| 遺物 | 細分 | 10房 | 9房 | 8房 | 7房 | 法 量(cm) | 特　　徴 | 遺物No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ヌケ | 1 | 15 | 28 | 90 | 62 | 高さ90～70×直径20.5～17.5 | 最も大型のヌケ | 26 |
| | 2 | 1 | | 4 | 43 | 高さ47～44×直径17～16 | | 21 |
| | 3 | | | 24 | 75 | 高さ35～30.5×直径16 | | 20 |
| | 4 | 15 | 13 | 65 | 64 | 高さ20～16×直径18～16.5 | | 18・19 |
| | 5 | | | 43 | 30 | 高さ19×直径11 | 最も小型のヌケ | 17 |
| サヤ | | | | 1 | | 高さ11.5×直径18.5 | | 16 |
| 筒状ハリ | 1 | | | | 1 | 高さ10.5×直径15.5 | | |
| | 2 | | | 40 | 37 | 高さ10×直径14.5～11.5 | | 5 |
| ハリ | 切込1 | | | 1 | 30 | 高さ3×直径18～17 | | |
| | 切込2 | | | 15 | | 高さ3×直径15.5～15 | | 7 |
| | 切込3 | | | 2 | 32 | 高さ2～2.5×直径12 | | |
| | 切込4 | | | | 1 | 高さ5.5×直径19 | 三角形の切込で脚をつくる | 6 |
| | 切込なし1 | | | 4 | | 高さ6×直径21 | | |
| | 切込なし2 | | | 105 | 106 | 高さ4.5～4×直径16.5～14.5 | すり鉢の重焼用 | 4 |
| | 切込なし3 | | 10 | 4 | 5 | 高さ3×直径12～10.5 | | |
| | 切込なし4 | | | 3 | 6 | 高さ3×直径10～7 | すり鉢の重焼用 | 2・3 |
| 棚板 | 1 | 48 | 28 | 38 | 8 | 縦35～34.5×横34.5～34×厚さ6～5.5 | 溝なし（瀬戸製） | 8 |
| | 2 | | 46 | 26 | 42 | 縦34×横34～33.5×厚さ6～5.5 | 溝4ヶ所(自作) | 9 |
| | 3 | | 1 | 1 | 1 | | 棚板を切断して加工する | |
| 方形焼台 | 台形1 | 5 | 96 | 112 | 111 | 縦11×横(上7×下11)×高さ6 | | 13 |
| | 台形2 | | | | 32 | 縦5.5×横(上7×下11)×高さ6 | | |
| | 方形1 | | | 25 | 39 | 縦11×横10.5～10×高さ6.5～6 | | 13 |
| 円形焼台 | 円柱1 | 12 | 12 | 28 | 18 | 高さ4～3.5×直径16～15 | | 25 |
| | 円柱2 | 10 | 4 | 59 | 39 | 高さ3～2.5×直径10 | | 1 |
| | 二段円柱1 | | | 1 | 5 | 高さ7～6×直径19～18 | | |
| | 二段円柱2 | | | 3 | 41 | 高さ3～2.5×直径20.5 | | |
| | 二段円柱3 | | | 4 | | 高さ6×直径29.5～28 | | 23 |
| | 二段円柱4 | | | 1 | 1 | 高さ6×直径22.5 | | 22 |
| | 輪状1 | | | 6 | | 高さ1×直径16 | | 24 |
| | 輪状2 | | | 2 | 1 | 高さ1×直径13 | | |
| 焼台類 | | 106 | 238 | 707 | 830 | 小計 | 1881 | |
| レンガ | 1 | | 56 | 57 | 37 | 長辺45～44×短辺11×厚さ6 | | |
| | 2 | 77 | 47 | 21 | 29 | 長辺38.5～33×短辺11×厚さ6 | | |
| | 3 | | 97 | 2 | 54 | 長辺28.5～27.5×短辺11×厚さ6 | | |
| | 4 | 29 | 36 | 1 | 3 | 長辺22.5～22×短辺11×厚さ6 | | |
| | 5 | | | | 10 | 長辺24.5×短辺15×厚さ7 | ひし形 | |
| トンバリ | | | 36 | 28 | 80 | 長辺23.5～22.5×短辺11×厚さ11 | | |
| 耐火レンガ | KAT-SK33 | | 2 | | | 長辺22.5×短辺11×厚さ5.5 | | 10 |
| | FYK33 | | | | 1 | 長辺23×短辺6.5×厚さ5.5 | | 11・12 |
| レンガ・トンバリ類 | | 106 | 274 | 109 | 214 | 小計 | 703 | |
| 七輪底 | | 5 | | | | 高さ1.5×直径12 | 製品? | 37 |
| 土管 | 短 | | | 2 | | 長さ31×直径14 | 製品 | |
| | 長 | | | 1 | 2 | 長さ62×直径14 | 製品 | 39 |
| 土管受 | | | | 1 | | 高さ24×直径28 | 製品 | 38 |
| 枕形 | | | | 1 | | 長さ19.5×高さ11×幅28 | 用途不明・何かの型? | 14 |
| 外装用タイル | | 2 | | | | 縦11×横6×高さ1.5 | 製品（昭和38年以降） | 36 |
| 製品・その他 | | 7 | 0 | 5 | 2 | 小計 | 14 | |
| 各房小計 | | 219 | 512 | 821 | 1046 | 総計 | 2598 | |

**表３　平野窯跡房内出土遺物集計表**

するためと考えられる。

８・９は棚板である。８は溝がない厚い板で、９は幅７cm・深さ１cm程の溝が４ヶ所刻まれている。棚板には両面とも砂が多く付着し、レンガを四隅に置いた痕跡や、直径10～17cm程の円形のつぼを置いた痕跡がみられ、様々な使い方がされていたと考えられる。聞き取りでは棚板は昭和37年頃から使い始め、溝無し（８）は瀬戸から購入、溝あり（９）は自作していたとのことである。８は胎土に粗い0.5～4mm大の砂粒を多く含む。重量は８が14kg、９が13kg程で溝をつくる９の方がほぼ同法量でも軽量になっている。なお、棚板を一部切断して加工した板も見つかっている。

レンガ類は基本的に立方体のため図化せず、法量のみ表３に示した。自作のレンガが５種類あり多量に出土している。これらは棚板の四隅に置いて組み上げるための支柱である。短辺は耐火レンガとほぼ同じ11×６cm程で高さが45cm前後・38cm前後・28cm前後・23cm前後のものがある。また、胎土や作りが粗く、ひし形状のものがあるが用途不明である。

10～12は耐火レンガで10は「KAT－SK33」、11は「FYK33」の刻印が見られる。重量は10が2.74kg、11が3.54kgである。10は房床面にレンガ段として敷かれ、上に棚板が組み上げられる。11は窯の構築材として火格子穴周辺に用いられていた。12の刻印「33」は11と同文で、12は11を粗く半割したと考えられる。これらの耐火レンガは陶器組合でまとめて安く購入していたとのことである。

13は台形状と直方体の焼台が釉着したものである。直方体のものは接地面に砂が付着し、その面以外は丸みをもつものが多い。長辺に丸みをもつレンガ状に作り、２分割したものである。台形状の焼台は半分のサイズのものもある。14は１点しか見つからず、用途は不明である。古墳時代の石枕のような形をしており、何らかの型の可能性もある。15は色見で窯の温度や焼成状態を調べるものである。並釉がかかる。色見鉤に引っ掛けて火見穴から取り出すため、側面に台形状の穴が開けられている。

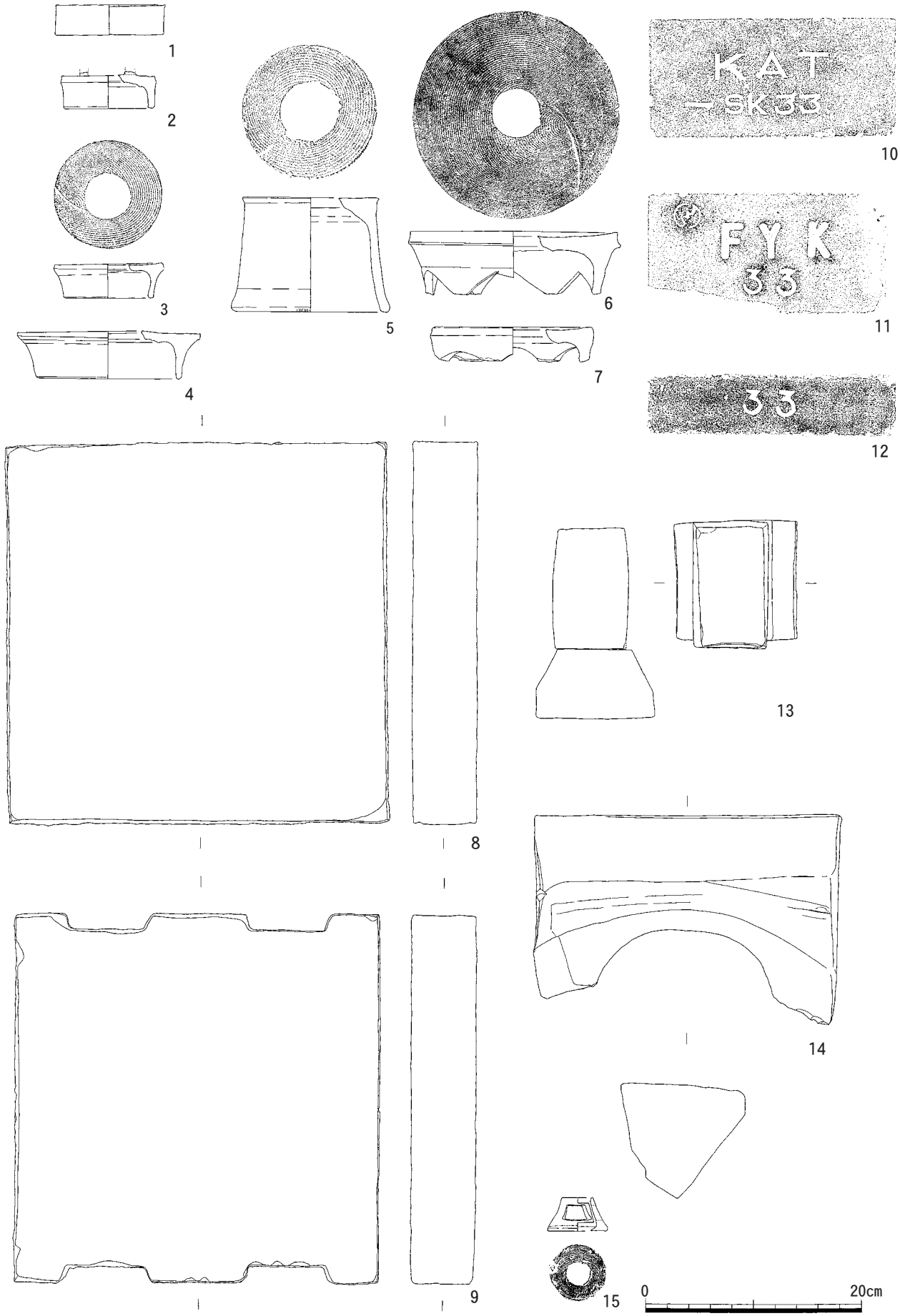
16は中に焼物を置いて窯詰めするサヤである。内面見込みに直径８cm程のものを置いて焼成したと考えられる。これ一点のみの出土である。口縁部に白い水酸アルミナを厚くつける。

17～21・26はヌケである。大きさから５種類に分けられる。17は小型のもので上面に砂が付着する。胎土は他のヌケにくらべて砂が混じらず精良である。側面上方の穴もない。18～21は高さが異なるのみでつくりは同じである。上面には砂がつき、窯のハマ（床）に10～16cm程据えられるため、脚部は砂が付着する。19は釉と砂が上面で約１cmも厚く付着したものだが、これほど釉が厚く凝固するまで使い込んだものは少ない。20～21のヌケの作成工程をみると、ある程度同じ大きさの中型ヌケをつくり、下を継ぎ足すことによって高さを調整しているようである。上面には砂がつき、円形焼台を重ねているものもある。脚部は窯のハマ（床）に12～22cm程据えられていたため、砂が付着する。26の大型のヌケは、上・下は同じ中型ヌケを使い、間に筒を継いで長く高いヌケを作っている。26は外面に大きくヘラで縦長の「×」が記される。「×」が２箇所記されるものもある。22～25はヌケの上に置いて溶着を防ぐ円形焼台である。23は脚状になり高さがあるが22は脚部がなく低い。22は２点しか出土していない。23は単独で出土したものにはあまり砂が付着しないが、26のような大型のヌケの上に２個重ねて粘土で目張りして接合したものがある。24は低い輪状で片面に砂が付着する。25は円柱状で中央に穿孔され、両面に多量の砂が付着する。他にヌケの上にいろんな種類の台が重なって溶着しているものもあり、状況に応じて様々な使い方をしている。

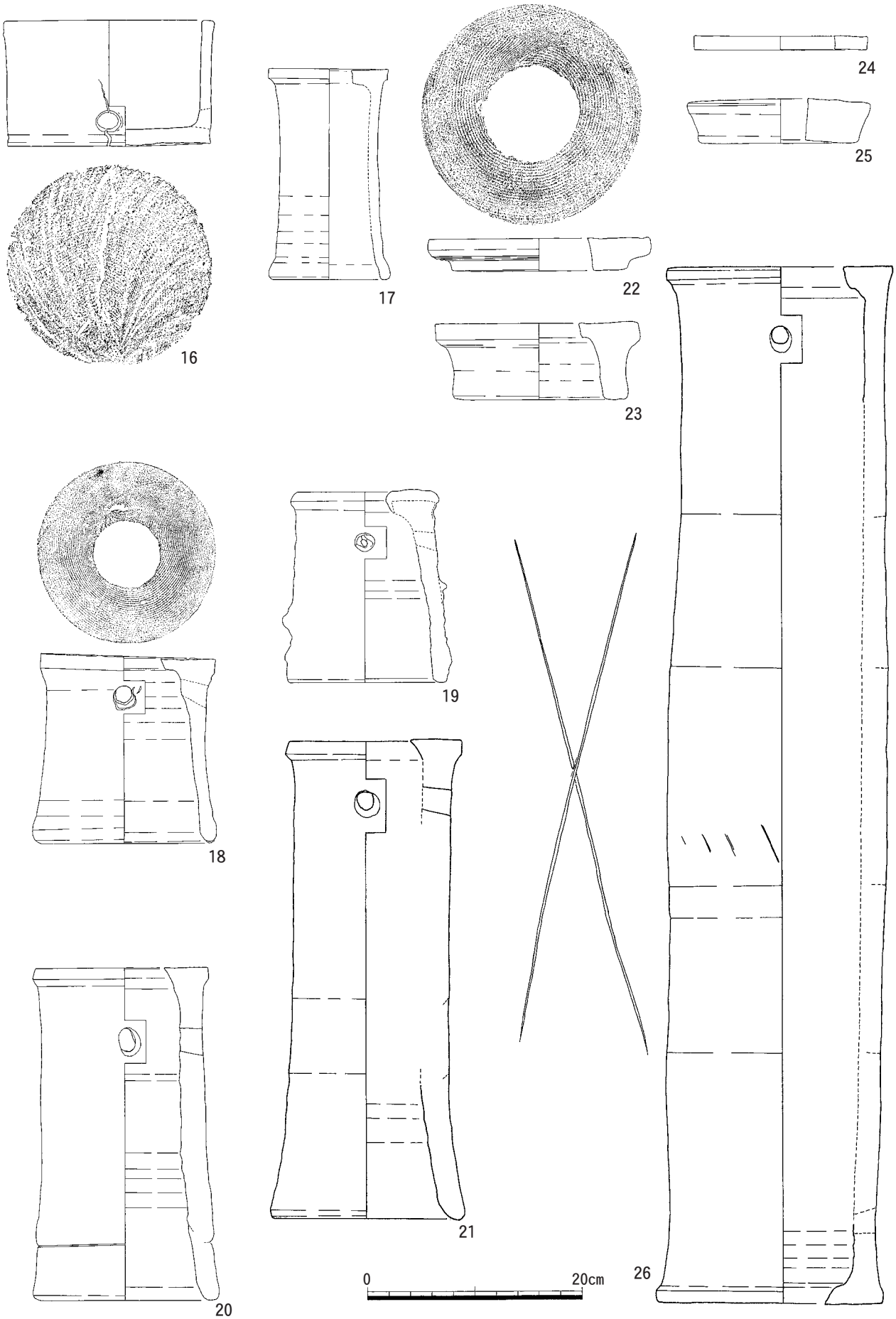
瓦（第８図）

出土した瓦は窯の屋根に葺かれたもので、この窯で焼かれたものではない。いずれも焼きの悪い製品を用いている。赤瓦が多いが、10房から煙出にかけてはいぶし瓦も多く使われていた。

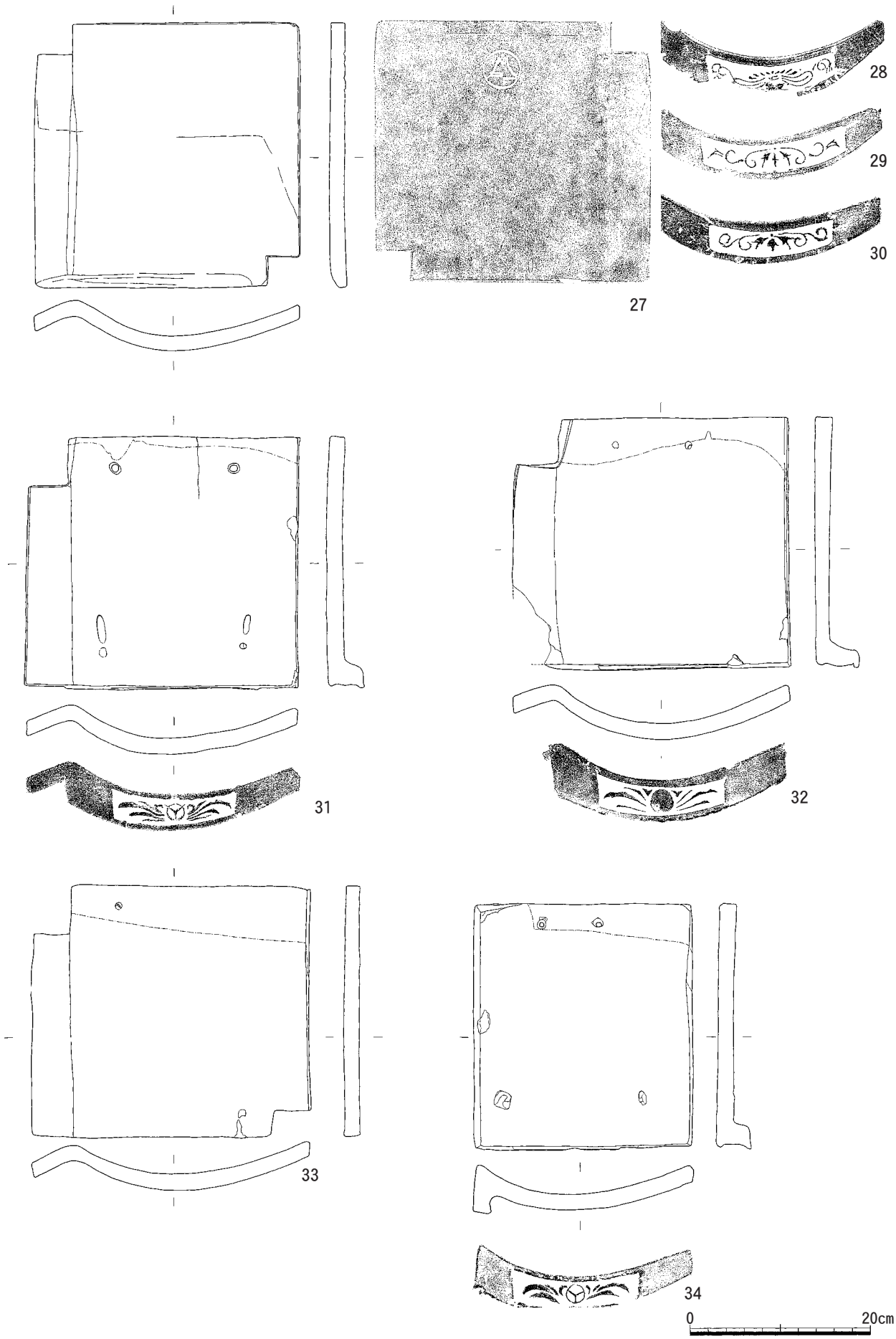
27・33は桟瓦で27はいぶし瓦、33は来待釉がかかる釉薬瓦である。27は凸面に山のような押印があり、いぶし瓦の既製品と考えられるが、押印のないものもある。生産地は不明である。全体的に質が悪く、瓦を葺く際の重なり部分（葺足）以外の露出部が色落ちして



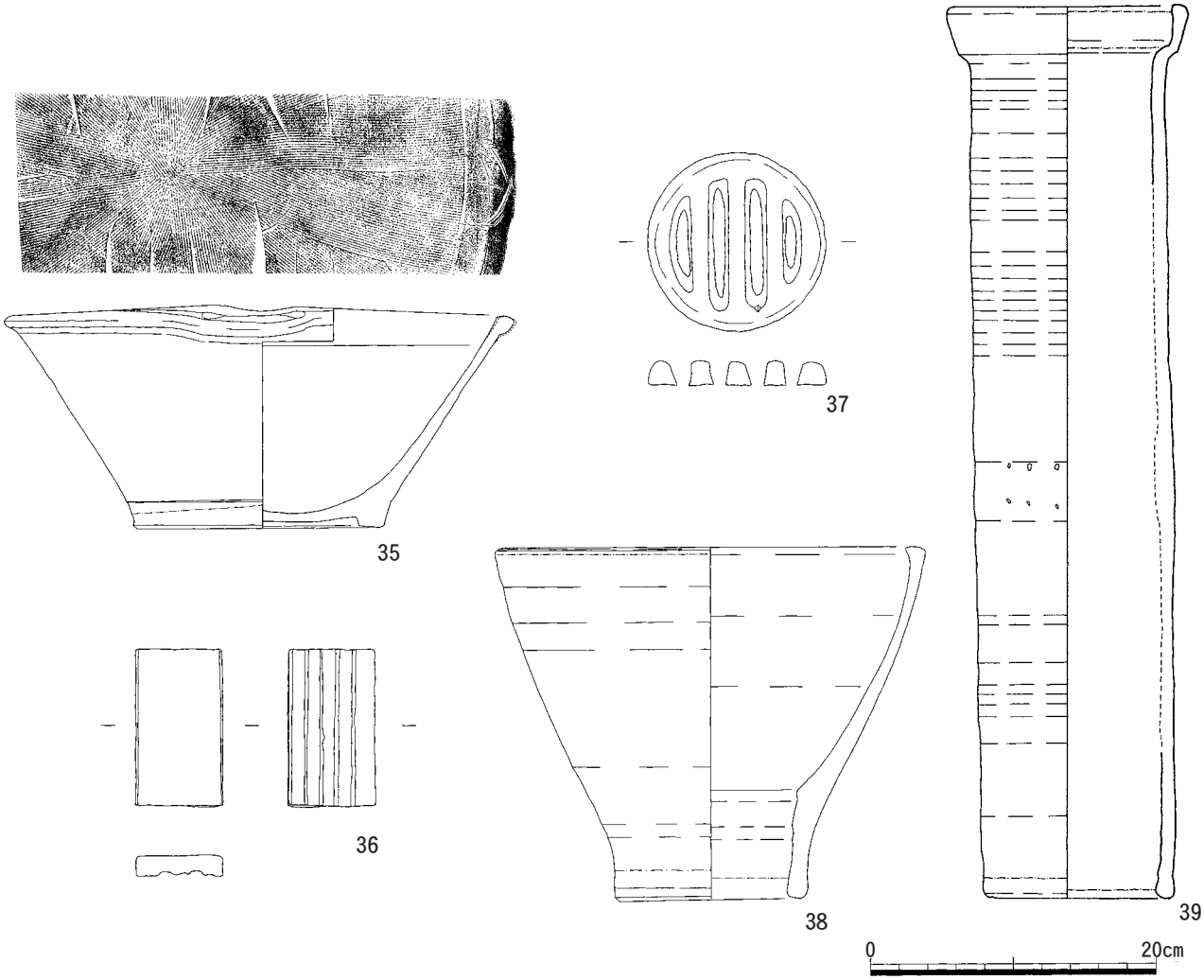

第６図　出土遺物（1）焼台・レンガ類（S＝1/5）




第７図　出土遺物（2）焼台類（S＝1/5）




第８図　出土遺物（3）瓦類（S＝1/6）




第９図　出土遺物（4）製品（S＝1/5）

焼台類（９房内）

いる。28～32は軒桟瓦である。花文が中心飾りのもの(28)、三葉が中心飾りで巻唐草が伸びるもの(29･30)、Ｙ字に丸の中心飾りから唐草が広がるもの(31)、丸いボタン状の中心飾りから唐草が広がるもの（32）がある。確認した軒桟瓦の点数は28が１点、29が４点、30が１点、31が３点、32が１点である。文様の種類では29が最も多いが、瓦全体では軒桟瓦の割合は少ない。34は左袖の軒桟瓦で文様はほぼ31と同じである。瓦の釉調は28～30が暗褐色で発色が暗く、31・32はやや明るく褐色になる。桟瓦も同様でおおまかに発色が暗いものと明るいものの２種類の釉調がある。

おおまかに軒桟瓦の時期を推定すると32の中心飾りが丸のものは、丸の大きさが異なるが、江津市矢源田窯跡（昭和22～39年操業）で焼かれている（江津市教育委員会2003)。

31のＹ字に丸を中心飾りにするものは、昭和８年新築時の原井小学校に用いられており、およその年代がわかる(浜田市教育委員会2005)。最も出土点数が多い29は窯が作られた昭和９年前後頃のものか若干古い時期と想定される。

製品（第９図）

製品としては、房内や窯周辺からすり鉢（35）・外装用タイル（36)・土管（38･39）が出土した。いずれも来待釉がかかる。35のすり鉢はこの窯の主要生産品で、窯周辺からは4点確認した。口縁は丸みをもち横につまみだされるが個体差がある。高台の外面を削るため、高台と体部との境には段が付き、釉もこの部分までかかる。底部は低い削り出し高台をつくる。すり目は反時計回りに重ねて施され、すり目の上端は沈線とナデ消しで揃えている。底径16～17cm・高さ10.5～14cmのものが確認できたが、実際はもっと多法量で作られていたと考えられる。すり鉢同士は直接重ねて窯詰めするため、高台下外面に重ねた下の製品のすり目跡がつくことが多い。また、内面見込みにも円形に重焼きの痕跡が残る。36の外装タイルは2枚単位で分割せずに販売していた。表面と長辺に来待釉がかかり、短辺にはかからない。使用時に穴から2分割して使うとのことである。外装タイルの不良品は棚板の壁の支えとしても使われており、6房の壁面にはタイルが点々と溶着していた。37は素焼きの七輪底で10房から5点見つかっている。38の土管受口は焼け歪んで縦に大きく割れている。上端は施釉後に釉を削っている。39の土管は半分の長さのものもある。

聞き取りでは、他にふたつぼ（来待釉・並釉）も焼いており、タイルは昭和38年頃から新たに焼き始めたとのことである。窯印は確認できなかったが、平野氏より「藤」であったと確認している。

## 第４章　総括

平野窯跡の発掘調査では、昭和９～45年頃のすり鉢などを焼いた石見焼の登窯跡を確認できた。周辺での石見焼窯跡の発掘調査は熱田町の室田窯跡（明治末～戦前頃操業・瓦窯を丸物窯へ改築）で行われている。平野窯跡は、やや後出（昭和９～45年頃）で、窯の規模が大きくなり焼台の種類が増えている。製品は規格品（すり鉢・土管・タイル・ふたつぼ）で品目としては少ない。

房内の砂面にヌケ・ハリを埋め立てる石見焼の伝統的窯積み法に加えて、レンガ段の上に棚板やレンガを組み合わせて段を作る窯詰み法が行われている。棚板とヌケを用いる窯詰めは、管見では市内の森脇窯（明治38年～平成３年頃)、大田市温泉津町のやきものの里などで行われている。現在の棚板は薄手で扱いやすく、大口に近い小型の房内に組み上げられることが多い。平野窯跡の棚板は昭和38年頃のもので、その後に改良が進み軽量化したのであろう。

昭和35年頃からのプラスチック製品の普及により石見焼の生産は激減しており、おそらく平野窯でも瀬戸から新たに棚板を導入してタイルを生産したり、品目を統一して効率改善をはかったと想定される。物原が調査対象外であったため、製品と焼台との対応関係など不明な点が多く、詳細は今後の聞き取り調査などで補足する必要がある。

棚板を用いた窯詰めを行う石見焼窯跡の調査は今回が初例だが、他地域でも類例の確認が必要である。また、これまでで最も新しい時期の窯跡の調査でもあり、今後の資料蓄積によりさらにポイントを絞った調

査を実施する必要がある。これからも調査例が増えることにより、各地の石見焼生産の実態が少しずつ明らかにされると考えられる。

**本文参考文献**


江津市教育委員会 2003『矢源田窯跡』

島根県教育委員会 1997「112 要害山城跡」『島根県中近世城館分布調査報告書〈第１集〉石見の城館跡』

浜田市 1953『浜田の窯業』浜田市商工水産課

浜田市教育委員会 2005『浜田市立原井小学校校舎建物調査報告書』

東森　晋 2004「道休畑遺跡の竪穴住居跡」『八雲立つ風土記の丘』№178　島根県立八雲立つ風土記の丘

平田正典 1979『石見粗陶器史考』 石見地方史研究会


**石見焼窯跡関連参考文献**


熱田貴保1993「石見地方における近世の窯業生産」『八雲立つ風土記の丘NO122・123』島根県立八雲立つ風土記の丘

柿木村教育委員会1982『唐人焼窯跡発掘調査概報』

河出書房新社1997「日本海と石州の赤い瓦」『図説 島根県の歴史』

川本町教育委員会1987『谷戸経塚・木谷石塔発掘調査報告書』

久保智康1994「近世赤瓦の技術系譜―「石州瓦」の位置づけをめぐって―」『八雲立つ風土記の丘NO124』島根県立八雲立つ風土記の丘

久保智康2005「日本海域をめぐる赤瓦」『日本海域歴史大系 第四巻 近世篇Ⅰ』清文堂

江津市教育委員会1991『田室窯跡発掘調査報告書』

江津市教育委員会1992『平成3年度埋蔵文化財調査報告書』

江津市文化財研究会1986『石見潟　第十・十一号　江津市の窯と窯跡』

江津市文化財研究会1988『石見潟　第十三号　石見焼（丸物と瓦）』

江津市誌編纂委員会1982「第7章　商工業の発展と農林漁業の推移 第1節　商工業の展開と発展　一石見陶器と石州瓦」『江津市誌 下巻』

島根県教育委員会1989『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』

島根県教育委員会1992『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』

島根県教育委員会2000『神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓』

島根県教育委員会2001『石見焼関連遺跡調査報告１（飯田A遺跡・長東坊師窯跡）』

島根県教育委員会2001『石見焼関連遺跡調査報告２　上府八反原窯跡（佐々木窯跡）』

島根県教育委員会2002『石見焼関連遺跡調査報告３　大田屋窯跡』

庄田知充2005「近世日本海沿岸地域における摺鉢の流通」『日本海域歴史大系 第四巻　近世篇Ⅰ』清文堂

鶴田真秀1972『石州瓦史』

浜田市1973『浜田市誌　下巻』

原　裕司1993「生湯窯跡」『八雲立つ風土記の丘NO122・123』島根県立八雲立つ風土記の丘

東森　晋1999「石見焼窯跡の発掘調査」『平成11年度　島根県埋蔵文化財調査センター講演会資料』

東森　晋1999「発掘調査からみた石見焼の歴史」『文化講演会資料』浜田市文化財愛護会

平田正典1996『築窯四代記　抄』

益田市教育委員会1996『益田拠点工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

松田忠幸1997.４.23　～９.３　「角の浦今昔　－江津の歴史と文化－」９～25　山陰中央新報

三沢治雄1998「動木窯の物原を探る」史跡探訪会

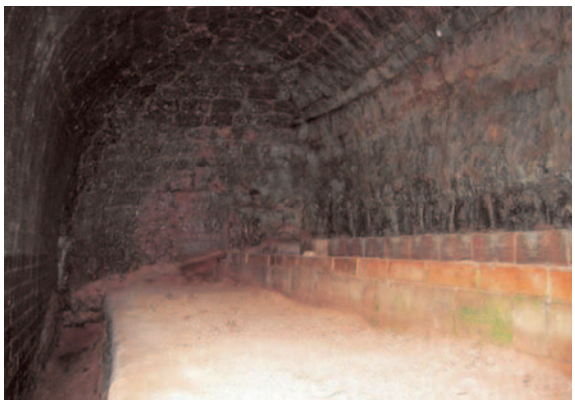
宮本徳昭1993「江津市の石見焼」『八雲立つ風土記の丘NO122・123』島根県立八雲立つ風土記の丘

調査前

９房作業場と階段

９房入口

９房内部調査前



9房内部調査後

9房壁面

９房床面火格子穴

９房天井

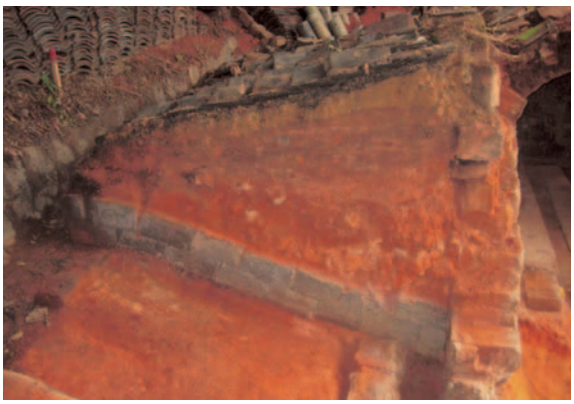
9 房天井露抜き穴

10房天井屋根瓦

煙出上面の屋根瓦

10房覆屋根の柱

煙出調査状況



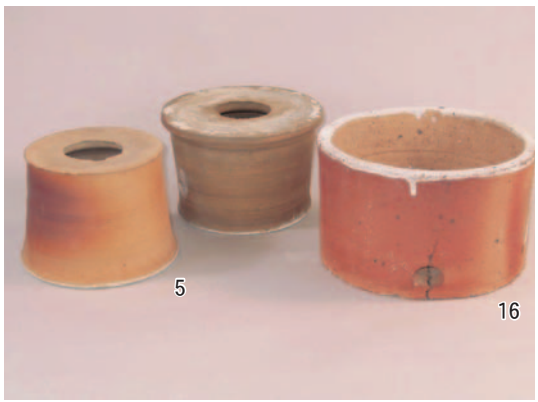
煙出断面

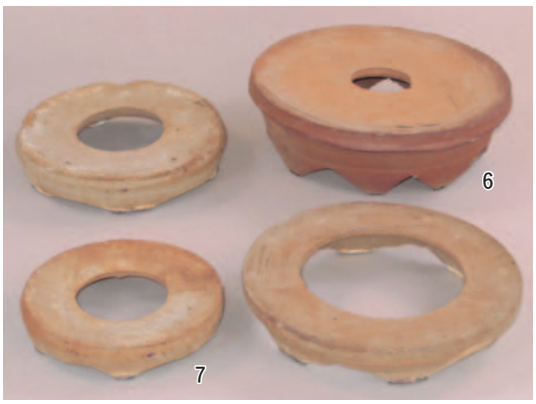
煙出の穴

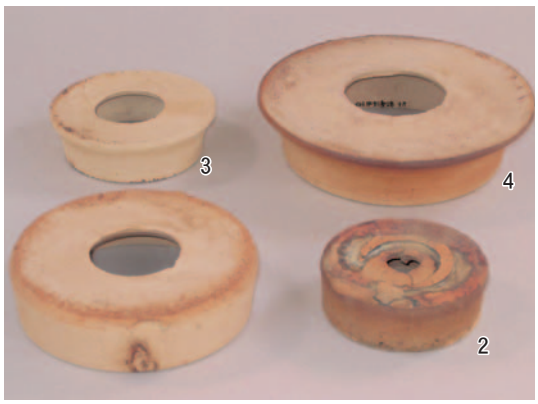
9 房断面（旧焚庭）

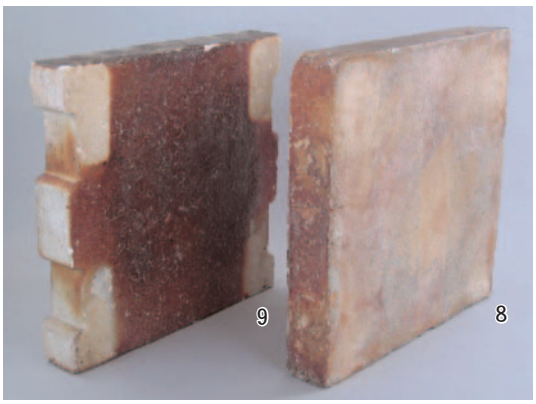
26

20
21
17
19
18


5
16

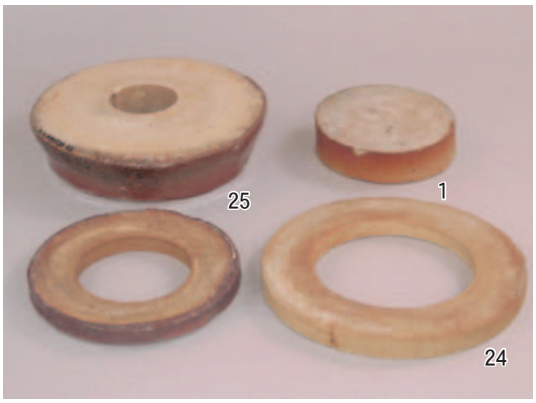

6
7


3
4
2

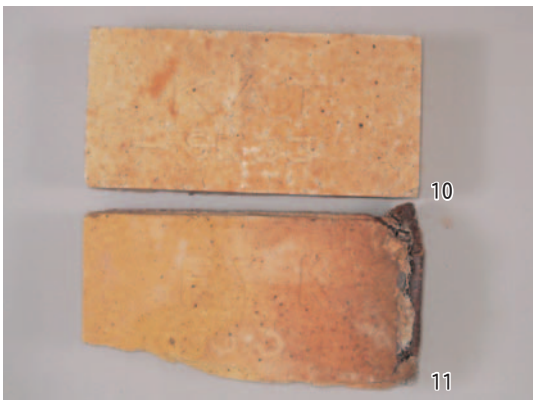

9
8

13

22
23

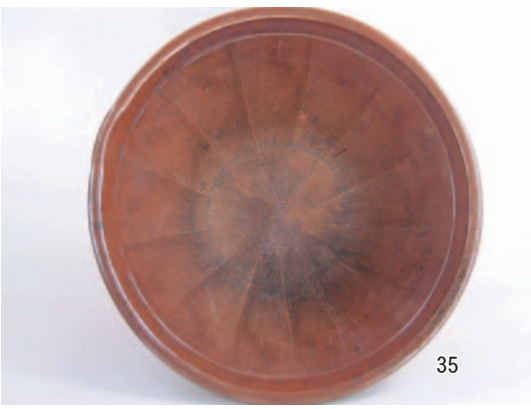

25
1
24

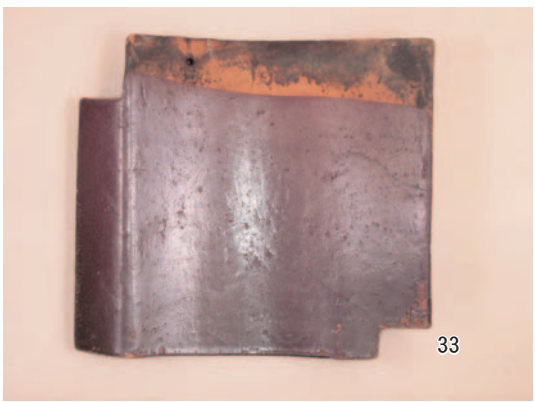
10
11
14
15


10
11

38
39

35
37
36


35

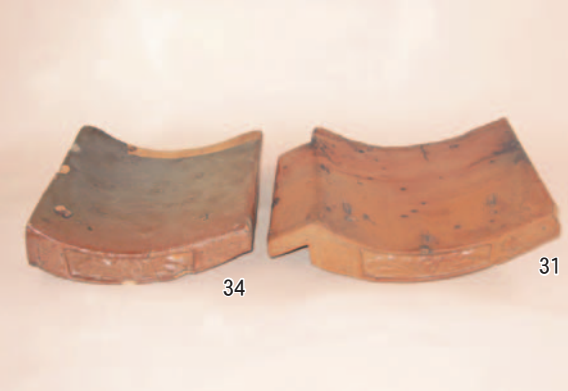

33

33

27

27

27


34
31

28
32

30
29

28
30
29
31
32

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | ひらのかまあと |
| 書名 | 平野窯跡（昭和９～45年頃の石見焼窯跡） |
| 副書名 | 地すべり対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 榊原　博英 |
| 編集機関 | 島根県浜田市教育委員会 |
| 所在地 | 〒697-8501　島根県浜田市殿町１番地　TEL 0855-22-2612（代） |
| 発行年月日 | 2005年12月 |

| ふりがな<br>所有遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| ひらのかまあと<br>平野窯跡 | しまねけんはまだしうちだちょう<br>島根県浜田市内田町 | 32202 | L185 | | | 20050803<br>～<br>20051019 | 150㎡ | 地すべり対策工事 |
| | | | | | | | | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平野窯跡 | 生産遺跡 | 昭和９～45年頃 | 石見焼の連房式登窯 | 焼台・レンガ類・すり鉢・タイル・土管 | 従来の石見焼にはない棚板による窯詰めを行う。 |

| | |
|---|---|
| 要約 | 江戸時代終わり頃から、石見地域では「石見焼」と呼ばれる粗陶器と瓦が焼かれ、現在も伝統産業として受け継がれている。<br>平野窯跡は昭和９～45年頃まですり鉢・つぼ・タイルなどを焼いた石見焼窯跡で、棚板を用いて従来の石見焼にはない窯詰め法を行っていた。昭和40年代後半にプラスチック製品や水道の普及により石見焼の生産量が激減する時期に当たり、江戸時代以来の「石見焼」が衰退し、伝統産業へ転化する様相を示している。 |

**平野窯跡（昭和９～45年頃の石見焼窯跡）**
**地すべり対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書**

発行　島根県浜田市教育委員会　2005年12月
島根県浜田市殿町１番地
印刷　柏村印刷株式会社